

墨田国際文化交流センター 北斎館

International HOKUSAI MUSEUM SUMIDA

— 交流を生む国際文化拠点 —



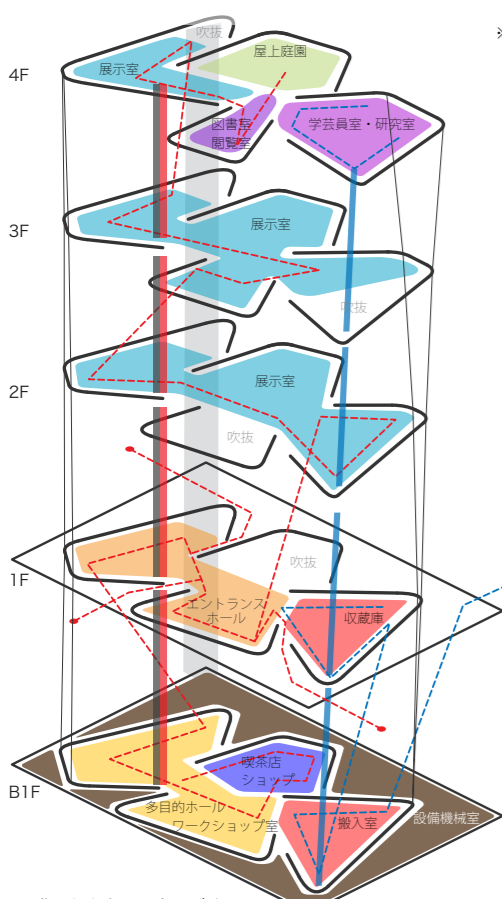
北斎をテーマとした美術館の設計理念

国際美術館としての建築の提案

現代にも通じる世界的芸術家のための美術館にふさわしい建築の提案をします。世界中に影響を与えた北斎は、エネルギーと革新に満ちていました。その精神を建築でも表現し、世界に誇れる美術館を生み出します。

現代の北斎の世界観の提案

北斎の絵には、うつろいの表現としての「水」、そして不動の存在としての「富士」が描かれていました。今はその象徴を見渡せる場所も少なくなってしまいました。そんな現代の東京で変化し続けるものといえば「都市」そのものではないでしょうか。常に化する都市の中で、「北斎館」は不動の存在の象徴のようでもあります。この建築で北斎が見た世界観を表現したいと考えました。



※面積および諸室は必要条件を満たした計画としています。また、展示室は国際的な企画展を開催するに足りうる面積を確保しています。

＜区民の生涯学習の場としての機能を発揮する＞ 学习交流のきっかけになる施設の提案

「文化は交流を生む」というコンセプトを基に複合的な文化交流施設の中核施設として、ライブラリー、講堂、ワークショップルームなど様々な学習環境を整えます。また公園と一体となった施設とすることで、子供たちの学びと発見のきっかけの場をつくります。

＜施設建設の工期短縮を図る＞

同時進行による工期短縮の提案

現場施工による躯体工事と同時に、内部の造作壁を工場で作ることによって、同時進行で施工可能となり工期の短縮を図ります。また、平面形状の単純化によっても工期の短縮を目指します。

＜施設のイニシャルコスト及びランニングコストの抑制＞

単純化による質の向上と低コスト化の提案

直線と単一半径の曲線からなる単純な平面を持つ建築は、同じ作業を繰り返すことで全体を施工することが可能となります。それにより施工精度の安定向上と、材料や施工性の面でイニシャルコスト削減を図っています。

ランニングコストの低い設備の提案

多重壁の仕組みにより外部環境の影響が少なくなるため、設備的な負荷が少なく済みランニングコストの低減が可能となります。また設備機器を必要諸室に隣接しての設置できるため配管ロスが減り、イニシャルおよびランニングコストが低減できます。

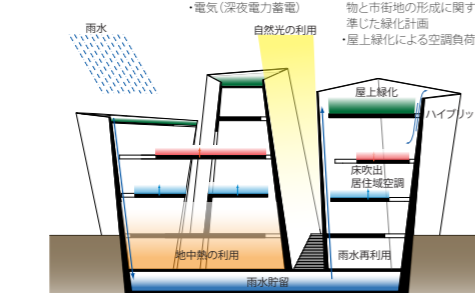
維持メンテナンスの容易な建築の提案

ガラス張りの建築にある窓面清掃が少なく、外壁面も光触媒等を使用することで維持メンテナンスに配慮しました。また設備機器も多重壁の隙間に設置することで点検や交換が容易になります。

省エネ／省コストを配慮した設備計画の提案

「LCEM(ライフサイクルエネルギー管理)手法」を取り入れ、建物のライフサイクルを通じて一貫したエネルギー管理を行います。また、建物の環境性能評価CASBEEで「Sランク」を目指して計画を進めていきます。

- | | | |
|---------------|----------------|---|
| 空調 | エネルギー | 環境 |
| ・暖気運転 | ・水(雨水利用) | ・「CASBEE S」を明確に目指す |
| ・ゾーニングによる空調制御 | ・空調(地中熱ヒートポンプ) | ・東京都緑化義務と墨田区良好な建築物と市街地の形成に関する指導要綱に準じた緑化計画 |
| | ・電気(深夜電力蓄電) | ・屋上緑化による空調負荷低減 |



観光・産業を含む地域活性化拠点としての設計理念

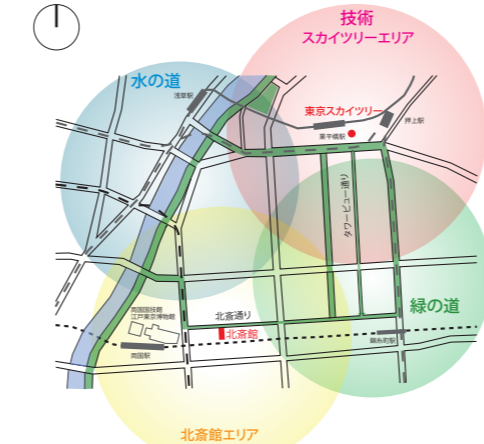
国際文化都市の提案

伝統、歴史、芸術、教育…それらが集中しているこの街のポテンシャルは比類ないものです。「北斎館」はその中核となり、美術館、研究機関、教育機関として、地域の中心施設となります。世界に誇る街として、海外からもここを目的に訪ねてくる人を生み出していきます。

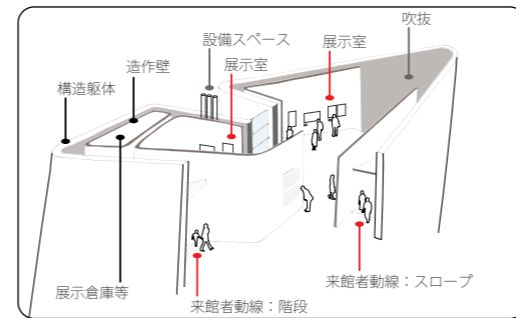
文化交流施設の提案

交流が文化を生み、文化は交流を生みます。この北斎館はその震源地として常に複合的な文化を発信していきます。様々な文化が新たな交流を生みだしていきます。

文化と技術を繋ぐ水の道と緑の道の提案



文化を集約した「北斎館エリア」と技術を粋を集めた「スカイツリーエリア」その2つのポテンシャルを墨田の象徴である「水の道」と「緑の道」で結びます。人々が行き交い、街に活気とにぎわいを生み出していきます。



＜まちに親しまれるランドマークづくり＞



街のスケールに配慮した建築の提案

大施設にありがちなスケールアウトした建築とならないよう、建築のボリューム感を分割し、この街のスケールに合わせたボリューム感とすることに配慮します。また曲面のある造形とすることで、親しみやすい施設となるよう心がけます。

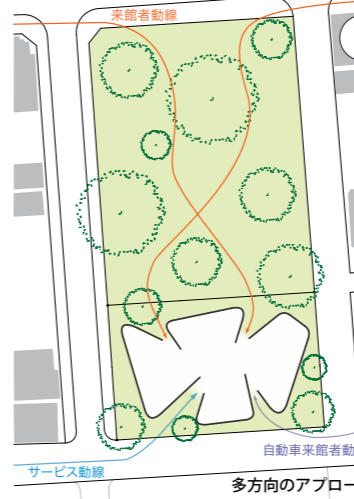
多方向性建築の提案

公園や通りの一部となる様に、建築には多方向性を与え、人々を内部に導き入れ往来ができるように計画します。また、新しい東京のランドマークは文化都市の中核施設として印象的な外観を持ち、人々の記憶に留まります。

＜周辺環境や立地背景を活かす＞

多様なアプローチが可能な建築の提案

4面が公園や道路に囲まれたこの敷地の特徴から、建築は正面性ではなく多方向性を持った計画としました。これにより建物は各方向から認識でき、また様々な方向からのアプローチが可能になります。北斎通りから公園を通ってのアプローチだけではなく、東側は駐車場との往来、高架側からは搬出入車両の出入にも対応した自由度の高い計画とすることが出来ます。



＜資料にやさしい空間づくり＞

多重壁による資料保護の提案

建築の構造躯体に内包されたもう一つの空間は外部環境の影響を受けづらく気温や湿度の調整が容易なため、展示室や収蔵室にふさわしい空間づくりが可能です。



紫外線に配慮した開口計画の提案

顔料によって着色された作品は紫外線による劣化が激しいため、ガラス張りの建築を避け、室内には間接的に外部光を導く計画とします。また、ガラスには紫外線対策を施します。

資料閲覧室の提案

貴重な資料の保護のためデジタルアーカイブに保存された作品を研究者や見学者が自由に閲覧できる様、コンピューターを備えた資料閲覧室の設置を提案します。

＜環境にやさしい空間づくり＞

緑にあふれた建築の提案

北斎館の屋上は緑化し、また建物周辺にも樹木を多く配することで、施設が公園の一部となるような計画とします。

負荷の少ない建築の提案

ガラス張りの建築を避け、多重壁構造とすることで、温度湿度の調整にかかる負荷を低減し、省エネルギーで維持できる施設にします。

自然エネルギー等の利用の提案

雨水を貯水することで、トイレなどで使用できるような計画とします。また地熱なども有効に使うことで、機械的設備の補助を担う計画とします。

維持メンテナンスの容易な建築の提案

外壁は光触媒の使用などで、メンテナンスがし易く、維持費がかからない計画を心がけます。屋上も緑化などで、防水面の保護に配慮します。また、多重壁の隙間を利用して各室に対応した設備機器を設置することで、配管経路でのロスが少なくメンテナンスもし易い計画が可能となります。

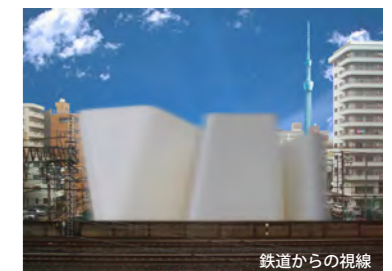
音に対する配慮の提案

美術館等の建築用途の性格上静かな空間が求められるが、敷地が鉄道の高架のすぐ横であるため音環境に対して十分な配慮をした計画とします。



公園と一体となる外構の提案

建物の周囲に生まれた余白に植栽をすることで、敷地全体が公園と一体に見えるような計画としました。この施設が街の人に親しみを持ってもらえるようにする提案です。



鉄道や道路から認識される建築の提案

敷地南側の高架を走る鉄道や、北斎通りを通過する人々から印象的な外観とすることで、施設の認知度を高めることを目指しました。国際的な美術館としてのランドマーク性に配慮し、一目で分かり記憶に残るような建築を心がけます。

